

もう何やつても「リツモリ初」やねん、だから結構

お得な学年

語り手 川端裕二郎(高校三期生 国税専門官) 聞き手 石田克孝

盛りだくさんの学校行事

木蔭はあるんですけど、競技中はずっと外に出て、何やったかな、応援合戦みたいな。簡易なテントぐらいはあったと思うんですけど。体育祭の思い出もう「暑い」しか出てこない(笑)。そうそう。言うても先生側も、まだ入って三年なんです。何をしたらいいのか全然わからなくて、どうやって体育祭しようかみたいな、話し合って決めていきますみたいな、そういう時期でしたね。

*

で、今ぱっと偏差値を見たら、なんかリツモリ、すごいですね。僕らの時は、名前書いたら受かるぐらいのレベルやったっけ。話がそれました。体育祭はそんな感じで、文化祭は前夜祭したり、屋台を部活で出したりしてたんですけど。花火もあげて。

—みんなの中で、「昔のリツモリ生は前夜祭で花火を上げてたらしい」って言う話があつて。みんな待ち望んでますね。

あつ、今はないんや。僕らが一年生の時、この前夜祭担当がうちのクラスだったんですよ。一の三が担当になって。ソーラン節踊って。で、「あすなろ祭開催」みたいな感じで。僕この太鼓四人のうちのどれかのはずなんですけど、写真が白黒で全然わからへんな(笑)。この前夜祭も

結構練習ときましたね。七月、八月ぐらいからやってたのかな。今も茶道室つてありますかね？本館のところかな、入ってすぐの和室のところで太鼓叩いて、ひたすら練習やってましたね。あと、他のみんなは準備で、装飾品とかなんやかんや作ってて。でも一年生は、そこまで忙しくなかったかな。

僕らの時はもう全部生徒でやる感じがあつて。お団子とか売ってました。フランクフルトとかもあったかな。食券を事前に買ってそれと交換するっていう形やったから。当日、現金のやり取りは無しみたいな感じでした。

*

—ちなみに、ここに書いてあるのは合唱コンクールですかね。

あ、そう、あつたあつた。これ一年三組で最優秀賞もらったんやけど、歌で取れたというよりは、見てもらった通り、歌よりはパフォーマンスで取った、っていう感じだったんです。今も合唱コンクールとかやってるんかな。この時は、結構イベント盛りだくさんやった。学校行事やったらあと何かな。(高校に)入ってすぐ、希望が丘文化公園で一泊二日とかで泊まって。飯盒炊飯とかして。青年の城っていうところに泊まって、夜通し友達と喋ってたら、武田先生やったかな、体育の先生。めっちゃ怖い先生に、廊下立てって言われて、説教された覚えがある。

—それはめっちゃ記憶に残りますね

一年生の時やから、もう何やつても「リツモリ初」やねん。だから、結構お得な学年。どんな人でも、結構ウェルカムみたいな感じやった。本当に「落ちた」っていう人を聞いたことがないぐらいの時だったんで。あと、僕らの時は夏くらいに、オーストラリアかカナダのどっちかに二週間ぐらい行っただけなんですけど。今はもっと長いかな、期間が。

―今も、選べる国が増えて二週間です。

あーそうなん。(僕らの時は結構イベント盛りだくさんでやって、APU研修、これも泊まりで行ったかな。APUって結構山の中にあつて、下に町があつて。だから、「APUでは下町に行くことを『下界に降りる』って言うてるんやで」っていう話を聞いて。そこで先輩や海外の人達と話したりして、「海外の人ってこんな感じなんや」って思ったのは、この時が初めてやったかな。中学までは、そんなに海外の人と触れ合う機会がなかったから。APU行って、「あ、ほんと海外の人しかいないやん」みたいな。そういう印象を受けたのはあつたかな。

二年生の時。まず体育祭が、市民グラウンドが借りられませんでした。って。本当はこの時に、芝生のグラウンドができてははずだったんですよ。でも、守山はもともと湖の近くやったから、掘れば遺跡が出てくると。リツモリの芝生グラウンドも、当然掘れば貝塚とかいっぱい出てくるわけで。だから工事がめっちゃ遅くなつて、「これはもうリツモリの中では体育祭できないな」ってなったんですね。で、どこにしようかってなつて、佐川美術館の隣の佐川スタジアムを借りてやることになつて。ただ、芝生が傷んだらあかんから、「芝生は靴で踏まないで下さい」って制限があつて。この辺もほら(裸足で競技している写真を指さして)、芝生のところで裸足でやってたりとか。いろいろ制限はあつたんやけど、それでも楽しくやって、結構盛大でしたね。

―体育祭とか文化祭で、役割は何かありましたか？

あつたあつた。体育祭には実行委員会があつて、応援担当とか、救護担当とか。競技の審判というか、手伝いみたいなのもあつて、その辺でいろいろ分かれてたな。でも、一番役割が多かったのは文化祭かな。文化祭の方が、みんなそれぞれ役割を持ってやってたイメージがある。二

年生からは劇があつて、リツモリの体育館ステージでやるんですよ。三年生になると、市民ホールでガチの劇をするんですよ。二年生は、ちよつとコミカルというか、笑いを狙う劇をする、というような感じになつてましたね。

*

―一番印象に残っている高三時代

そう、三年生の時は、いろいろ出し物が復活したんですよ。市民ホールで、三年六組で劇をして。たしか、台本、残ってたわ。こんな感じで、キャストは誰だとか、スタッフが誰だとか書いてあつて、音響が僕。そう、脚本も一から作つて、音楽もみんなで持ち寄つて。もう、この辺は本当に自由で。今もそうかもしれないですけど、先生もノータッチで。市民ホールのスタッフの人と直接やりとりして、「この場面での音楽流して、照明はここを照らしてください」とか。

―それは(市民ホール側が)やってくれはる感じなんですね。

あ、そうそう。照明はあんまり素人が触ったらあかん、みたいなのがあつたから。ただ、音響は僕が操作して。懐かしい。そっか、これ劇終わった後にみんな写真撮つてたんや。いやあ、懐かしいな。その時は、もう結構ガチにみんなやって、演劇の先生とか呼んで。「こういう風にするといいですよ」っていう指導もしてもらいながらやってた覚えがある。いやもう自由。自由でしたからね、ほとんど。この時三年生やったしね。最後の年やったから、一番印象に残ってるかな。一番盛り上がったやつっていうのを思い出す。みんなでワーキーやりながら、石田くんも楽しんでやってください。で、海外研修。八月十六日から三十一日までで、オーストラリアとカナダの二つに分かれて。僕はオーストラリアで、こっすね(集合写真を指して)。だいたい、このメンバー

で、今でもつるんでる人たちですね。カウボーイのところ、めっちゃムチを鳴らす体験をやったりして。こっちはカナダやね。

―オーストラリアとカナダで、迷ったりとかはありました？

あ、あったあった。カナダは都市部じゃなくて、結構自然メインの田舎の方に行く感じで。一方で、オーストラリアはシドニーとか、結構な大都会に行くので。どっちがいいか、めっちゃ迷って。僕はあまり時差ボケしないと思われるオーストラリアを選んだんですよね(笑)。ブルーマウンテンに行ったり、コアラやカンガルーを触ったり。で土日はシドニーの方に行って観光したり、オペラハウスを見たりもしたね。

―ホストファミリーの家に泊まったんですか？

そうそう、二週間泊まって。お寿司とか食べたかな。焼肉とか。ほんと、いい人たちで。気を遣って日本食を出してくれはったんやけど、オーストラリアに來たし日本食じゃなくて、できればオーストラリアの料理を食べたかったな、っていうのはちょっと思ってた。だいたい、みんなこれが初海外で、なんかめっちゃ楽しかった思い出がありますね。

*

三月十一日、二〇一一年、東日本大震災の時。その日が卒業式で。卒業式が終わって、「ちょっと揺れてるぞ」みたいな話になって。で、テレビつけたら、津波の映像とかが流れてて。

―その時は、どこに住んでたんですか？

その時は、滋賀の野洲に住んでました。その辺はね、「あ、ちょっと揺れてるな」ぐらいで何もなかったんやけど。で、確か三年生じゃないけど、二年生か一年生の誰かで、宮城とか、その辺の出身の人がいて。「すぐに帰らないと」みたいな感じになってたのを覚えています。今も、ニュースで「三月十一日」って聞くと、この卒業式と東日本大震災

のことを、一番に思い出しますね。

―高校最後の卒業式の日、それが起こるって、結構びっくりしますねいや、俺びっくりやった。やっぱり未だに友達と集まると、そういうえああの時地震あったよねみたいな話がね、結構出てくるのがありますよね。

*

今も繋がりのある友達と過ごした、放課後の時間

―放課後とあって、どういう時間の使い方をしました？

それはあれかな。真面目に勉強してた、とかそういう話の方がいいかな(笑)。

―いや全然、趣味とかでも。

あのね、もうぶっちゃけた話を言うと。みんな放課後は部活やってる人は部活やってたけど、僕はカラオケか、あと、南草津に今もあると思うんですけど、「BB」っていう、遊び放題のところとかに行ってた。

―そういう放課後、結構楽しそうですね。みんなで過ごすのが。

そうそう。で、このメンバーはみんな内部進学がもう確定してるメンバーやったんで。他の高校はセンター入試とかで、遊ばへんってなる時期で、カラオケとか、そういう所がめっちゃガラガラやったんですよ。

だから、この時期は特に、めっちゃめっちゃ遊んでましたね。もう高校も最後やし、大学で遊べるかどうかからへんし、みたいな。で、勉強も頑張っただけなんですけど、基本は定期試験中心なんで。模試受けて、とかはあんまりなく。

―クラスメイトの人たちについていうか、クラスの雰囲気や、ご自身との関係とかはどんな感じですか。

クラスの雰囲気はね、和気あいあいとしてたね。もう、ほぼ自由やったしね。リツモリの方針として、要はもう大学に近い感じでやっていく、みたいなのがあったんやと思います。五教科は普通に取ってましたけど、専門的な自分で希望して取る授業とかもあったんで。僕は、世界遺産の授業とか取ってましたね。

―通学は何でされてました？

僕、チャリやっただけですよ。四十分かけて雨の日も風の日も。みんな大体、守山駅からバスで来てたんですけど。今もきつと裏手のところにバス止まってると思うんですけど。

―その時、仲良かった友達とは、一緒に自転車で帰ってましたか？

いや、自転車で帰るのは僕だけだったんで。僕が守山駅まで行って、そこからさらに一時間かけて家に帰るみたいな。

―その「自転車の人」と「電車の人」が一緒に守山駅まで歩く文化は今もありますね。

あ、そうなんや。僕らの時は、本当もう田んぼだけ、みたいな感じだったんで。ただ喋りながら帰るだけ、みたいな。駅前に出たら、平和堂とか、たこ焼き屋さんがあるんで。そこでちょっと買って帰る、みたいなこともあったんですけど。まあ、そんなもんかな、高校時代で思い出せるのは。

*

高校から大学、そして今にも繋がった学び

高校時代の時、やはり何をやってもリツモリ初めてっていう状況だったので、新しいことを挑戦する経験をだいたい培ってたんです。だから大学では高校であまり触れてこなかったような、新しい分野にチャレンジしたいなと思って学部を決めて、今に至ってます。

―なるほど。では大学時代に新しいことをやってみようとして、挑戦したこととがありますか。

挑戦したことは、簿記とかかな。簿記の勉強とか、あとゼミの活動かな。色々と論文書いて発表したり。高校の時は、そこで何か発表というよりは書くこと重視だったけど、大学ではそこから実際にアウトプットして、周りにちゃんと伝えていくみたいなところをやってましたね。

―ちなみに大学のゼミで活動していた分野というのは、どんなことをしてたんですか。

ゼミの時は、海外の人を日本でどのように雇用するかや、日本の工場を海外に作る時に、どうやって現地の人たちから協力を得ていくか。そういういった人材の確保、人的資源管理論という分野をやってました。ただ、大学の授業はマーケティングコースを受けていました。ゼミはマネジメントの分野をやって、資格は簿記とかファイナンスをやって、そういった感じで、経済全般、経営全般の知識を学びました。

―では、大きなきっかけじゃなくてもいいんですけど、今の職業をどう知ったかや、なぜその選択肢が自分の中にあっただのかなど、教えていただけますか。

うちの学部から僕の職業に行った人って、すごく少なかったんですけども経営について学んでいくうちに、自分が経営を行うだけではなくて、他人の経営を管理する方に興味を持って。実際にその会社で働くのではなくて、会社や人をお金の面で管理するのもちよっと楽しいかなと思っただけで、今の仕事の方に行っただけかな。

―資格を持って働きたいと思っていったっていうのはあるんですかね。確かにね。色々と簿記とかファイナンスプランナーとか、いろいろ取ってたんで。それ活かせるところで、と思ったところはありました

ね。

―大学や今の仕事で、高校時代にやっていたことが役に立ったエピソードとかはありますか？

やはり大学時代にめっちゃめっちゃ痛感したのは、レポートを書く力ですかね。高校の時から論文を書いてたんですよ。大学入ってから、課題でレポートの提出や論文の試験があったんですけど、もう高校時代からだいぶ書くのに慣れていたので、その辺は役立ったなと思います。高校時代の時に文章を書く能力は身につけてたので、その面は大学入ってから楽でしたね。

―それは、教科の授業の中でレポートとかがあるという感じですか。

高校の時に国語表現という授業があつて。その授業ですごいしっかり文章を書くのを教えてくださって。高校の最後も卒業論文を書いたりして、そういったことで文章能力がついていったのだと思います。他の授業でもレポートの提出とかちよこちよあつたので、そういうのも影響してるんですけど。一番印象に残ってるのは、国語表現の授業かな。

―では大学時代にやったことが、今、職業以外でも大人になって生かされていることなどはありますか。

ゼミで自分の考えを発表する場が結構あつて、ゼミの大会や交流会で自分の話をしたりしていたので、今も自分の意見を言ったりだとか、考えを伝えたりだとか、そういったところは大学で身につけたものが今も活かされているのかな。高校の時は、ひたすら書く作業で、自分の考えをまとめる作業をして、大学ではそれを人に言葉で伝えていくようなことを学んで。今はその二つどちらも活かせると思います。

―高校時代にやったことと大学時代にやったことが繋がり、今のスキル

に活かしているという事ですね。公務員は何か特定の分野に特化するというよりは、そういう総合力みたいなのが求められるんですか？

そうそう。スペシャリストより、ゼネラリスト的な。仕事も毎年ちよつとずつ変わるからね。

―内面の部分で言うと、自分の性格とか人柄は自分の進路にどういうふうに影響したかなどはありますか。

高校時代は和気あいあいと楽しくみんなでやっていく、作り上げていく、みたいな話をしてたと思うんですけど、大学でも一人でやっていくんじゃないくて、みんなで協力しながらゼミ活動を進めていったりしました。今の仕事でも、やはり一人で黙々というよりは、周りとは色々相談しながら、楽しくやっていけたらいいかなっていうのは、考えながら日々進めてるかな。

―周りコミュニケーション取りながらですね。

そうやね、やつぱり一人ではなかなかできること限られてるんで、いかに周りを巻き込んで連携取りながらできるかやね。連携取る時はやっぱり楽しくなかったら、みんな嫌になつたりもするんで、和気あいあい楽しくはいつも心がけてるかな。

―やつぱり自分たちが楽しんでる方が、周りもついていきたくなるっていうことですね。川端さんが周りとは協力してうまくいったエピソードなどはありますか。

大学だったらゼミの大会とかで、ゼミ論文の発表をする時があつたんですが、そういった大会でいい評価をもらったり、他大学との交流でいい評価ももらったりしましたね。

―そうやってゼミで複数人で協力し合うことで、結果には繋がりやすかつたっていうことですね。卒業論文のテーマはどんなテーマで書かれた

か覚えておられますか。

あの頃は、環境問題が結構取り上げられていて、確か「琵琶湖の富栄養化をなくすためには」みたいな論文だったんじゃないかな。地球温暖化やオゾン層の破壊とか、そういった環境問題がピックアップされてる時期だったんで、高校の授業でもそういったことに触れることがあったので。

―その時は、本などで調べ学習っていう感じなんですか。

そうそうそう、本とか統計資料とかは、滋賀県庁が出してたりだったか、他の本などにも載っていたりするんで、それで調べたりしてました。僕はインタビューとか、他の人達にアンケート取ってまではしてなかったけど、教育関連の卒業論文書いている人は、他の高校とかにアンケート送ったり。企業とか会社系の話書いている人とかだったら、実際に会社訪問してインタビューとかやってましたね。みんなそれなりに苦労しながら、三年生は論文書いてましたね。

―その原稿を書き上げるのは、やっぱり結構時間かったり、大変なものなんですか。

結構大変やった。四百文字とかそういうレベルの話じゃなかったから、字数制限だけだったか忘れたけど。かなり長い論文を書くのは、卒業論文が初めてだったから、担当の先生と相談しながら仕上げていきました。

―サークルどんな選び方したか教えてもらえますか？

大学のサークルは、あまり馴染めなくて入らへんかった。色んなスポーツをちょこちょこやっていくようなサークルに入ってたんですけど、ちょっとノリが合わずフェードアウトして。それでサークルではないんだけど、立命館大学の図書館で、学生バイトをやっていました。やりたい人多

かったんかな、なんかすごい倍率高くて。大学行きながら、空きコマでスタツプとして入れるっていうのだったんです。学生生活の中で、合間合間で稼げるようなところだったから人気があったんだと思います。でもうまいこと受かって、そのメンバーとはすごい仲良くてきて、そこまでチャライ人いいひんかったから。

―図書館のスタッフですよね。しっかりした人が多そうですね。

そこでみんなと、「この科目はいいで」とか「このレポート書くんやったら、この本おすすめやで」とか、色々と情報共有しながら。図書館のスタツプ、楽しかったね。仕事も図書館のホームページちょっと変えたりとか。あと図書館のグループディスカッションができるブースみたいなところがあって、その運営とかやってたかな。大学だったら他の人はアルバイトとかやり始めて、結構苦労してやる人とかもいたから。その点図書館のスタツプはスキル磨きながらアルバイトできたしね。資格とか取ろうと思うてもお金必要やから。そのお金でまた自分のスキル磨くみたいな感じで。実家から通ってたから、そこまで生活費からなかったしね。下宿だったら、他のバイトも掛け持ちしてとかやってたんだろうけど。アルバイトでお金を稼ぐことよりは、知識身につけるとか、スキル身につけるとか、そういう方を重視してたのもあったから。もう図書館のバイト一筋で。だから、きつと図書館の正規の職員さんから、「きつと川端くんって暇人なんやろな」って思われるぐらい日数入ってたと思う(笑)。

―今度は勉強のことを詳しく聞かせていただけますか。

勉強は、もう本当に公務員試験がしんどかった。今までだったら、国語、数学、理科、社会、英語、この五教科が主な試験だけど、公務員試験は、五教科プラス、憲法、民法、行政法と会計学か。労働もあったか

な。とりあえず、法律の関係とかがすごく増えて、それプラス面接が二、三回あったかな。僕、高校受験の時は一般推薦で、大学は内部進学で上がってきたから、試験らしい試験を全然受けてなくて。初めて受けたのがこの公務員試験で。「受験してた人はこういうしんどいことやってんねんな」と思いながら受けてたの覚えています。

―単純に学力っていう意味ではってことですかね。

そうそう、面接とかだったらね、まだある程度話すの慣れてるからいいんですけど、単純に学力となるとね、きつくなって思いながら。その時立守の内部進学の友達と一緒に公務員試験の講座を受けていて、二人で「これやばいな、これわからへんな。」って言いながら、やばいな、やばいな、言いながら試験を迎えて。でも二人とも合格できて。

―やっぱり受験がなくても、将来資格とか取るんだったら勉強は絶対しといった方がいいってことですよ。

そう、やっぱり勉強しとかないときついな。何か話すにしても、やっぱり大本の知識がないと出てこないし、知識無いのに言葉だけ言っても、やっぱりもう薄っぺらい内容になるから。大本の知識つけて初めて自分の意見とか言えるしね。勉強は大事やね。そう、だから高校三年生の時にもうちよつと勉強したらよかったなと。高校の時は公務員試験を受けると思ってたから。

―じゃあ大学時代は資格とかのために、勉強すごいされてたってことですよ。

そうそう。いや、このまま何もせず、大学で遊び呆けていたら将来困るなど思ってた。ちやうど資格も取れて単位も取れるっていうのが簿記の授業だったんで。これって一石二鳥でいいなと思って簿記を取って。簿記取り終わったら、次に役に立ちそうで取りやすい資格はないのか

色々と探したら、ファイナンシャルプランナーを見つけて。これいいやんって思ってた。ここで初めて税金とかそういう行政側の話をちよつと学んで、その時公務員も考えるようになって、みたいな感じかな。

―それを持っていることで、基本的な知識とか、他の人よりは、詳しくなるってことですよ。

そうそう。やっぱり何かしらね、大学でスキルとか資格とかは取っておけた方がいいよね。その時も、周りに僕こういうこと学んでたんですよって口では言えても、履歴書とかになんもなかったら、本当に学べてんのって感じになるから。そんな感じかな。ありがとうございました。

―ありがとうございました。

【感想】

語り手がふと思いついたことを、そのままの言葉で聞き取ることができ、今と比べると、全く異なる学校の様子が伝わってきました。そのころに創り上げられた自由な雰囲気や伝統に、今と繋がっている部分を感じました。また、数多くある学校行事を、とにかく楽しんでいた当時の空気が生き生きと伝わってきました。リツモリ初期の、貴重なお話を聞くことができ、とても楽しかったです。

(次ページに続く)



右：語り手 川端裕二郎さん

左：聞き手 石田克季